

TCアルププロジェクト『人間ども集まれ!』



手塚眞

木内宏昌

男でも女でもない第三の性“無性人間”を生産・輸出することで成り立っている独立国・太平洋国。

天下太平（てんかたいへい）という男の特殊な精子から製造される“子供たち”は、人間の欲望を満たし、戦争の兵士として使い捨てされる道具として出荷されていく——。

こんな破天荒で恐ろしくシニカルな手塚治虫の漫画『人間ども集まれ!』がTCアルププロジェクトで舞台化される。脚本・演出はこのところ串田作品をサポートしてきた木内宏昌。脚本執筆真っ最中の夏のある日、手塚治虫氏の長男で、ヴィジュアルリストの手塚眞さんを訪ねた。

撮影 ● たかはしじゅんいち

# 『人間どもも集まれ！』が面白い （木内宏昌） TCアルプとだからこそ、



きうち・ひろまさ

学生演劇からの小劇場活動を経て、tptで海外戯曲の演出・翻訳に取り組む。近年の活動として、片岡愛之助出演『炎立つ』、内野聖陽出演『イリアス』、栗山民也出演『アドルフに告ぐ』などの脚本、満島ひかり出演『秋のソナタ』、麻実れい・田中圭出演『夜への長い旅路』などの翻訳。佐藤オリエ出演『おそろべき親たち』ほかの翻訳で第7回小田島雄志・翻訳戯曲賞受賞。まつもと市民芸術館では『海の風景』で串田との共同演出を担当。11月上演の熊林弘高演出『かもめ』の翻訳・上演台本を務める。

—眞さんは手塚プロダクションの役員でもいらっしゃるの、作品を管理する立場でもいらっしゃいます。『人間ども集まれ！』を舞台化すると聞いたときはどう思われましたか？

**眞** いいところを狙ってきたなど（笑）。木内さんが昨年脚本をお書きになった『アドルフに告ぐ』（神奈川芸術劇場で上演）や、『陽だまりの樹』などは手塚治虫（以下、手塚）の作品の中では劇画的で、舞台になってしかるべき雰囲気を持っています。物語がしっかりしていて、リアリティがあるから。けれど『人間ども』は漫画でしか表現できないものだから、どうやるんだろうと興味を持ちましたしね。

**木内** まつもと市民芸術館を拠点に活動するTCアルプにぴったりだと思って提案したんです。役者が舞台に立つときに何を必要とするか、もちろんそれぞれでしょうけど、彼らはせりふがなくてもすんなり作品世界に入っていける。何かがないから演劇ができないということがないんです。その確信から、この集団だったらイケるんじゃないかなと思っています。

**眞** なるほど。木内さんご自身で『人間ども』を買われたんですか？

**木内** いえ、僕が買ったのではなく、友人が置いていったんです（笑）。それで25年ずっと本棚に。

**眞** ほかの手塚漫画は持っていたんですか？

**木内** あるときからハードカバー版が出版されるようになりましたよね。それを集めていました。幅を取りますから本棚が埋まってしまって、ほかの漫画は処分して手塚棚をつくっています。

**眞** それはうれしいです。

**木内** 『火の鳥』『陽だまりの樹』『アドルフ』などはいろんな方が舞台

にされるでしょうけど、僕の中では『人間ども』は「みんな知らないでしょ」と価値が高かったんです。

## 非常に生々しい現代的な物語

**木内** それにしても、すごく恐ろしいタイトルですよ。無性人間たちが人間と平等の権利を要求すると、彼らを生み出した人間側は受け入れませんが、和解にならなくて「去勢をしろ」とさらなる要求をしてくる。そして「人間ども集まれ！」というせりふは最後まで読まないと出てこない。舞台化で困るのは、最後のシーンをやらないと、『人間ども』にならないことですよ。

**眞** 原作の題名だからと押し切れることもできますけど、舞台の最後でこのせりふを聞いてみたいですよ。へたな演出家はきっと最初に言わせちゃうんでしょうけど。

**木内** それ、ちょっと考えました（苦笑）。

**二人** ははは！

**眞** 『人間ども』を描いたころの父は、綿密にプランを立てて漫画を描いていました。だから『人間ども』は最後のぞくっとする瞬間を狙っているんです。この作品は極端な虚構の物語だと言いましたが、案外リアル。ただアニメや映画にしても陳腐になるか、リアルにしてもつらい話になってしまうでしょう。父があとがきで「リアルに描いたら負けだ」と書いているように、軽いタッチの絵だからこそ重い場面もさらっと読めてしまう。そういう意味では、舞台にこそ可能性がある気がします。—眞さんは『人間ども』はどういう物語だと捉えていらっしゃいますか？

**眞** 昔は単純なSFだと思っていましたが、今は分析的に読んでしまいますね。父はよく3つの柱で物語をつくっていました。一つは、男でも

# 映画やアニメにするよりも 舞台でこそ 可能性がある作品 (手塚眞)



てづか・まこと

ヴァジュアルリスト。1978年、高校在学中に監督した「FANTASTIC★PARTY」で注目を集める。1999年、「白痴」でヴェネチア国際映画祭招待・デジタルアワードを受賞。2005年、テレビアニメ「ブラック・ジャック」で東京アニメアワード優秀作品賞に選出される。主な監督作品に「星くず兄弟の伝説」「妖怪天国」「ブラックキス」、著書に「ブラックモーメント」「ファントム・パーティ」「ヴィジュアル時代の発想法—直感をいかす技術—」「手塚治虫—知られざる天才の苦悩—」など。一般財団法人手塚治虫文化財団代表理事。手塚プロダクション取締役。ネオンテトラ代表取締役。最新作「星くず兄弟の新たな伝説」(仮題)が準備されている。<http://www.neontetra.co.jp/stardust-brothers/>

あり女でもありという人間。『ロボンの騎士』や『鉄腕アトム』など形を変えて綿々と描かれているテーマですね。宝塚歌劇の影響から始まって、本人が劇団で役者をやっていた経験もあって、それゆえに男や女になったりするんです。そして本人のトラウマでもある戦争への批判的な視点。ここでは戦争をショーにするというシニカルな設定です。3つ目は父子の関係。普遍的な親子関係、人情話が根底にあるからこの虚構性が成立している。『人間ども』はこの3つ目が非常に重要だと思います。父親の存在感が希薄な時代に、天下太平は「俺は父親だ！」と言い切る父親像を貫いていますよね、見た目は安っぽい頼りないけど。そして付け加えると、ISが若い兵士を洗脳して、戦いに挑ませているのと同じだと思うと、ものすごく現代的ですよ。

**木内** 生々しいです。『アドルフ』のときは「人はなぜ戦争をするのか」を現場で話し合っただけで原作に向き合っただけですけど、『人間ども』は早々に「商売になるから」と答えが出てしまっている。今の時代なんの注釈もいらない。性の問題も、男らしく女らしくという言葉が時代錯誤です。

## 無性人間の側から物語を考える

— 木内さんは脚本化していく作業をされているのでしょうか？

**木内** はい。けれど串田芸術監督が脚本を押し付けずに、みんなで作るというスタンスなんです。だから緩めの本でスタートしようと。何か欠落しているところに何か加わると豊かになる、そういう作業を大事にしていきたいですね。

— 松本で2回のワークショップを行っています、どこに狙いを置いていたんですか。

**木内** 昔、「新人類」という言葉がありましたよね。

**眞** はい、ちょうど僕らのころですね。

**木内** 僕はCMで眞さんを見て、こういう人が「新人類」の旗手なのかなと思ったんです。「無性人間」という呼び方も、今で言えば「ゆとり世代」も、父親世代が新しい世代につけるものじゃないですか。『人間ども』で言えば、僕は天下太平側から、世の中こんなことになっちゃってごめんね、という立場なんです。TCアルプのメンバーは30前後ですけど、最初のワークショップでは「みんなはどっち？」とひたすらしゃべっていました。

**眞** 無性人間の側から見ると違った発想が浮かび上がってくるかもしれない。

**木内** 無性人間は統一行動をとること、服従することに喜びを感じる。役者が無性人間を演じたときに、最初はそれをやってしまうんですけど、まったく面白くないんです。だったら無性人間だけを描けばもっと違うことが生まれるんじゃないか、2度目のワークショップはそういうことを試しました。僕からはまだ何も投げかけていません。

**眞** 出発点が漫画であっても、いろんな人の考え方や感性を混ぜているうちに全然違う、とんでもないものができたらそっちのほうが面白いですよ。なぞるだけになってしまうのが一番つまらない。映画では脚本は設計図だから書いてないことは誰もやりません。演劇のように稽古スケジュールを取れないし、みんなで考えるという作業も難しい。そういう意味ではうらやましいです。これを観に松本にうかがうのが楽しみです。